

「春秋日記」①（明治22年～23年）

タイトル	「春秋日記」①（明治22年～23年）
著者名	能海寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第15号
ページ	37－51
発行年	2010.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）淨蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

「春秋日記」

石 峯 記

※ 今回から、3回に分けて能海寛の「春秋日記」を掲載します。

明治22年9月

13日 午後、高等中学、吉田、村河、原久、而平山氏（但し平山欠）尋常中学に行き返る。
髪を摘みたり。平出兼安と郷里の法言へと二つ短書を出す。

14日 入寮。転寮、第六号、久富米次郎、村上寅吉、西原莊十郎、平尾君と僕。

15日 日曜。平岡君来る。病院前豊岡宿也。井上操来る。島庄行、藤堂と二人。憲法講義ありたり。

16日 大谷参詣。詣して授業受く。

17日 講堂に於いて宮島舎監の説諭ありたり。

18日 この頃、空気のわやつきて、活発化なく何となくおかしなに困る。安本円（海）氏より短書を受く。斉藤宇八より郵便書面を受くる。藤本逸太郎死去を報す。B行。上田と二人。

19日 斉藤宇八、一寸原組連中へ手紙を認むる。明日、これを出すべし。洋服を作ること。12時より就寝するも2時までつか□□す。門限5時30分までと言のが門限程は除かれたり。

20日 彼岸の入り。門限及就寝晨起の公告出る。手紙を出すを忘れたり。少雨。文章。

21日 本山参り多し。御髪剃り多し。反省会の会幹を投票す。寺本君を推したり。今日より、昨日の新規則実行。曇天。岡本重昌へ短書を出す。斉藤の甥よ、今日、投宿す。斉藤エンシヨウ氏の法話ある。午後6時より30分間余り。議に宗大谷広大なる日佛教の真宗の有難に感心実に□なす。大谷の心書す。本寺。大雨。談路を12円の米価□□□。国へ書信。昨日、洪水あり。

22日 離別、藤堂哲、東京行の為、島庄に行く。足利近太郎帰国せんとする為、下落の際、京によりたる。来月。15、6日頃、再上京のつもりと一等軍曹にてありき。日曜日。参詣人多し。田舎人学校参観人多し。弟斉より手紙をよこす。河口君に逢い英文会のことを一寸話す。

23日 秋季皇霊祭國中あり。昨夜、盗人入り、内にては、ケットを取られ文にて舎監の寢室に入りたるゆへあわてて下駄を置いて逃げ去れり。藤堂君、8時40分発して東京に行く。今日、名古屋までなり。稲荷まで、同汽車にても、上田と二人送る。稲荷より東福寺、泉誦寺、その他、名所を歩き、新町花屋町北のB店へ、二人きり。斉より葉書を受る。竹下君着京して校に来る。平山君と同道也。院寮長、名和のことにつき内儀の変更のことありたり。長確にあらざる故、吾人の心確ならず。晩、6時より宣布院に於いて、一二三氏を弁者として幻灯会あり。大和大洪水の景境を実視せられたるを述べられたり。親子三人助かりたる。狼の出で死体を食ろう。山崩れ等誠に驚き入りたり。

24日 岡本重昌より手紙を受る。若林より箱食を持ち来る。斉に短書を出す。冬洋服を猿橋に頼む。

25日 入寮。以前よりの課業表なれども今、爰に写しおく。

月 漢 中村、地 佐久間、代 角田、訳 松山、内 熱田、

火 体 池野、幾 角田、訳 松山、図 宮島、読 セツパード、

水 博 中川、英作 ランバート、代 角田、地 佐久間、漢 中村、

木 体 池野、会セツパード、訳 松山、幾 角田、内 熱田、

金 漢 中村、博 中川、地 佐久間、図 宮島、英作 ランバート、

土 体 池野、内 熱田、代 角田、訳 松山、文 ランバート、

今日までの実際、授業時間は左の如し。16日、月、4。17日、火、4。18日、水、4。19

日、4。20日5。21日、土、4。22日、日曜。23日、秋季皇霊祭。24日、火、5。今日、水、4。7日間に30回也き。10時、この和田義軌理学士。本校を去りて、伊予に行かる（今迄は月給80円。今度は、200円也とか）離別の為、又文学寮生一同へ講堂にて一辞を述べられたり。□□諸君の前途遠し。アフリカ内地を探索者の如く、梅花の春□□□□皆障界物ありたれども夫れ堪忍と勉強にて得たる□□諸□□これにて守て、将来、国家の為、宗教の為、高名を挙げんことを書き改む。□□□4年前期生、寺出君□□□□□惣代の親切謝し守る後、盟言と又御開山と法然の流罪の別歌を言いたり。夫れより一寸、日野より、一言ありて和（田）氏の御豆菜様と言いし一言にて別れたり。一礼を述べた後は普通校の在留中2、3年前、和（田）氏来られ普（通教校）の講堂にて初対面の辞を述べられたるを知る。今如氏これ世間の常也。早きものかな。西依及も一人と僕3人B行きたり。好天。総ての人は国家の為になりつつも、又われわれなれば宗教の為になりつつ金もうけて利を得べし。夫れなり。只金もうけのみは甚だ悪むべし。

26日 好天。彼岸の終日。大谷派本山に参詣す。木、5。皆、生理書を頼む。手島氏へ也。英文会の為、来土曜日会して談し、「アジアの宝珠」及び「十二宗綱要」を人を分けて翻訳、日本文へ、又英よりの手紙、新聞等を日本に訳しこれを英文会の付属部とし、本趣意は英文を解して作文するにあり。

27日 橋（本）来る。桑名辺では、米商250万円も損をしたり、儲けたりした人あり。東京にては1円にて白米8斗の由。美濃にてもおとどしの米100俵も3円50銭（尤も4月俵）で売りとる由。炭俵2俵にて東京で1円の由。金、4。余は実に輕躁なるからかと知らねども、学生多数増えより。馬鹿にせられたり。悲しからずや。人好の無き者にてあるや。予もヒヤアヒヤア□□□□。少しは心もあるし、精神の内にありて、外に顕さる如し。己は嗚呼。琉球人、縁づく前は手に菊の刺青嫁せば、夫には葉を付くべし。日本人、一人当たり1丁四方と地□□と。琉球の端より北海道又端まで□□にて3昼夜也と。I am a new Buddhist. Ijr nan cerece leaves. Day Book 翻訳家と（将来遠国）布教家（当時□□）。

28日 本校の（まだのとき）本宗信者の（まだまだ）今の伝教家の（まだまだ）今の宗教家（まだまだ）今日、地球上、生活の生物の欠点たる道法こそ予の目的なれ自利他より肝要なり。「法の道しば」を内に送る。桑門の仏前の火伝を向へし。「道法の手鑑」今日あるいは夫れに似たる題の編纂なすべし。昨日の様なことを書くな。内に、自らかえりみて謹み勉強するにしかなし。この前の度、帰郷の時、禁酒なれとも、今度帰る時は、道法、道法、道法と毎席言べし。禁酒を言いしは、全く、之を行ふに外ならずんば也。前は禁酒家。この度は道法家也。又必要は御経及び29日の如きなれば也。御経より道法てこと。文字ある処を書き出すべし。土、3。洋服を作り来る。2円10銭。晩、就寝まで笠原、斉藤、僕3人。互いに前途に付き思想を述べ互いに得る処ありき。

29日 日曜日。佐竹氏の元に7、8名行き、法話を聞く。大いに得る処あり。名利をはなれることと称名相續すること実に肝要なり。午後、尋常中学に行く。已然、清谷不在。病院前、豊岡、平山君等を訪う。皆不在。四条を過ぎて祇園にて清谷君に出会い、入校につき談す。返り安本秀人に寄り帰る。藤堂より短書を送る。東京牛込区猿樂町10青山宿也。近頃、風邪にて4、5日、甚だ困る。風呂は隔日なり。

30日 昨夜、第12号室にて、中島君の処ランプ破裂し畳2枚と座板焼通たり。恐ろしき。今日よりは、ランプ二階へ持上ること出来ずと云う、舍論ありたり。斉より手紙を送る。兄、妹、登、流行病（赤痢）のこと申し来る。今月の入費算用したる。8円96銭5厘也。来月より小使3銭より多からざるべし。斉へ手紙出す。28日、晩、清谷よりくれたる『教海一滴』を笠原より受ける。月、5。今月16日より51時間授業を受く。一朝も、上京以来本山参詣を欠かさず。大谷派大門

跡は従二位にならる新門は、従三位にならる。山形大臣藤島了隱帰朝す。如何大□□を彼等はなすか、予は影乍ら、その運動を見んと願ひしおる也。

「春秋日記」

石峯記

明治22年10月

1日 8円70銭なれとも内4円は、貯金となす。何れは、貯とめ貰うたるものなれはなり。然れば、只今は金4円なり。18銭より外になし。朝、鼻血出つ。先上人正月建夜なり。火、4. 本山参詣。『政教日記』を斉に送る。共に『法の道しば』6部。予も『政教日記』を求む。

2日 前住上人御正月につき休。大谷に参詣す。五條より上り、西依に寄り認めて安本に行く。風邪甚し、早く就寝す。

3日 風邪□□□。亀谷の死せる帰ること□□□□□なる由。下宿願いを出す。木、4. 明日、願に許可するや。

4日 金、5. 予は、4. 4人よりて、Bに行く。明日は、行軍あるとて7時半□□□さす。然し、梅田、笠原等と種々目的等の談話をなし、11時半就寝す。歌や仏教やの面白くありたり。

5日 朝、4時起床す。5時発して、本寺200名、西山□葦狩行の事御坊より8時、山奥に入る。直に入り両□□□□□一杯を取り夫れより、この時、弁当を食し、10時山上中にて10町もへだたり□□松を取り□□松茸を入れ汁を煮る。山は、10円□□松茸2貫目取りたり。夫より4、5人は先に帰る。予一人は、泉月桜に入り、1時帰着。せんに行く。泉にて□には弱る。藤井と行きたり。ぜんに。今日は、梅田と朝2人共、和服にて同道にて話し話し行き、愉快なりき。今晚は、7時より龍□□を受取る。そこそこに談話盛んにてありたり。山にて、焼いて食したるも味もよかりし也。本山参りを怠る。

6日 朝、起おそし。斉に『頓智雑誌』を送る。藤堂より国々人、3人へ手紙を送る着。井上操氏刑法講義ありたり。上田、吉田、僕の3人油小路Bに行く。(安本) 秀人へ行く。本山参りを怠る。日曜日なり。

7日 月、5. 午後2時、東大学寮にて柳祐信宗教二大要務。徳永満之宗教家の本分(まこと)、南條文雄、利他心桐、江村、秀山譲、職を或いは於て、所感を述ぶ。外一名演舌あり。当日は大谷派御門跡の御譲職、御受職にて七條より六條(東)一杯皆旗と提灯をあげ□火をあげ、すこぶるにぎわかし、明日も、まだまだ11日頃まで、にぎあわよし。来年の、今日頃思うに促に成行かすとか見たや念願成就□□□□□べし。但し勉強は倍して勤励すべし。晴天。

8日 火、5. 越前のせき賢能元寺校生(退校せらる)□□□□□なること知れ事務所にて□□□□僧にあり乍ら如此也。片山に笠原と行き2人野外に遊ぶ。今日、下山□□□□なる続軍なるや。晴天スケッチ380頁なれば一日15頁ずつにて1ヶ月には充分終るへし故に、1ヶ月専門にすべし。

9日 水、4. 許可せられて2時より下宿す。宝町通り魚棚上ル廣□方安本宅当分勉強の為、東中筋花屋町上ル片山宿。今日も、昨日の□□□せき来りきれみせらる。先ず、一つ安心が出来たれば、いよいよこれより□々其目的に進歩すべし。下宿以来の日記、この裏より、いよいよ始まる也。午後5時着席。夕飯下宿日。

10日 木、5. 通学。晩、ステーション通を、3人にて散歩す。『反省雑誌』発せらる。2、3日前、中島裁之、昼と寮焼きたる為、7日の謹慎1円32銭の罰金を申付けらる。予は、之不当と存す。藤堂君に手紙と清谷に葉書を出す。

11日 金、2. 法言兄より手紙を受る。午後、兄へ手紙を出す。

12日 土、4. 名古屋東橋町29番地安本円海氏短書を出す。上級生写真に行く。課業表14日より改正せらる。正午、小火事ありたり。弥陀の本□へ通へ□□□道を迷うたる。我々か□へ返れとは光□□□す。父母ゆえ□□に行のゆへ本国に返れという。覚めて後、寝たる間はしらねども、目を覚ましたのはのときは親の懷に居ると思え共元より寝ている間も懷に住まいて居りたり。晩、化学にて12時寝る。

13日 朝、橘、伊藤大英と共に出て、野間の宅に寄り1時間。尋常中学に行き清谷寮に入り学課等の話しをなし11時発にて帰る。晩、淡島に行きBに瓦松、西依と3人行く。

14日 月、5. B瓦松君帰国す。朝、足利軍曹来り面会す。田中友に宿すゆへ、夕方遊に行く。夫より橋本の宿に行き返る。英文会一周年目也。

15日 足利、大津に帰る。火、3. 午前11時より勤行の為休。朝、本山にて下駄を取られたり。素足にて帰る。龍谷会。大雨。

16日 御命日。大谷龍谷山報恩講につき休。業、午前。参詣す。招魂祭靈山にぎあわし。半晴半曇。返り道中五条に郵便局に寄り為替を受取る。七条を散歩す。

17日 朝、学校に一寸行き、平山君に面会す。登へ法話を送る。午後2時、笠原来り。同道にて校に行き勤行。斉藤氏の説教ありたり。新聞を読む。伊藤伯辞職。その他条約改正。議論ごうごうたり。諸大臣内閣の変動実に大なり。梅田、笠原と湯外に散歩す。今日は知恩院に帝国高等哲学院演舌あり。西依等行く。予は行かず。今日は、招魂祭ありたり。予は行かず。神嘗祭日なり。阿弥陀仏の歌権大納言藤原為謙。①あさかすみ、翠にかすむ□□□法ふるあけゆきのつもらざりしを。②あきやまのみね□□□のたちこめてふもとのさとに□□□□。③あひそめてみなれしの□□□つくしつるかな。④あき□つ□みを□□のたまくらにふけゆく夜半のつきうらめし。⑤あきしげきみねの□ためをたのむ□ふかきめぐみはつきしとぞ思ふ。⑥□□□□のあわれぞおほきあ□□のあか□□□□ありあけのつき。⑦みゆき□□み□□□ふみつけてみかりしとみのしろごろもみ□□□□。⑧たよりなきたびのほかにはた□□□れたれにみやらをたづねとはまし。⑨ふしみやるふもとのさととはふゆつれてふみやあらしのふるしけれかな。⑩月に□□づれなき人はついによそつらきところはつくしつるかな。⑪あつまじのみちはものうしたびころもふるさとしのぶつきや恋しき。⑫あきしけきみねはいのちのたのまれてふつきみの里のつと免のみして。

晩、橋本宿に遊び行く。辞職等の新聞を見得る処ありき。返り早く寝に就す。

18日 午前10時大経勤御奥教院殿の廿正月なり。午後2時建夜報恩講執行。説教。井伊様、実に感じ入り候。晩、七日初夜勤行。説教。小山氏実に感心仕候。橋と少し談せし処ありたり。

19日 朝6時出校。御晨勤行。説教、松島氏□□の御卓見の見識と又吊秀為る処を延べらる。即ち近くは大経□の如く法花に対して一々超絶したるを述べて遂に一代諸經の信よりもてり。□□伝堂真宗等のこと北国の人を化したる□罪の為等の如きは愚かなるか如きなれども、これ道法の賢固にしてしかも学問のある処感じ入り候。大和国祭の人京へ30銭。本山へ1円。伏見舟か宿なり。舟し感心又たれ□□与田正溝の来るは如実に喜ぶものなくして、他□□□喜□□これ□□□敷こと也。昨日、午後4時頃大隅伯□□□□為に傷かる脚を□なしたるもの其場□□自殺す。□電報。10時より小経。日中終□□□。齊去年に比せばやや筋せられ□□と見る返紙を受る。普校に行く。

20日 日曜日。午前、井上操氏の刑法講義ありたり。日中、久富とB行。午後1時より藤島了隠氏の欧米より帰朝して、初対面演舌佛国大学中小学アカデミーメンバー等より僧侶の学校英国にてオックス大学等より、□□□学校並に衛生等のこと話されたり。晩、新町大丸に恵比寿の為、人形を造り見せ賑やかにありたり。19、20、21日の3日間、見覧を許す也。安本に行く。

21日 月、4。雨天。『伝道会雑誌』17出つ。□□大隅伯を傷しは、久島某の福岡県人也。晩、新町辺まで散歩す。

22日 火、5。英文会を引受る河野始治と前田得念へと2通の□書を出す。投影画をコンニャク版にするとしたり。好天。来る27日、日曜日を以て、『新仏教徒』第31号を出すべし。これに付きても種々考ふる処あり、又英和を一部おく。

23日 水、5。学校新築の図を見る。橘の宅に行き□新聞を見、外務大臣来□記のこと内閣の□□肖像ありたり。

24日 木、5。21日に内閣大臣皆辞表を出したり。夢の世のうきは今出そうれしけれ弘□の舟乗りたる身。護持会口数今□万4700口。金4万円以上は岐阜のあり□。

第四号 『春秋ノ日記』

石州天頂山石峯

明治23年1月

1日 朝7時半起床。浴顔後、阿弥陀経、文類正信偈、源信章、終3首引き大経上巻、直宗宝典、初一切り訓読し御勤行をなしき。雑煮を食せし。父上へ書面。兄上へ書面。岡本重昌へ書面。藤堂より葉書を受く。午前10時より、福田君、山本遵一郎元の諫谷君に寄って、日本橋小網町豊島へ行く。雑煮を食し築地本願寺に参る。中角より角なら19間にして至ってよき寺なり。夫れより一寸藤本教順の宿に寄りし処14、5日前、京都へ帰られたる由。夫より藤堂君の宿に行き、晩飯を得て後6、7名奉君等とトランプの遊戯をなしたりときに鈴木、藤丸君は脚気病の爲入院して昇進せんとして、大に氣遣い、晩、藤堂君電報を掛たり。夜十時半、雨降るに傘なく帰宿す。東京はハゴ(板)盛んにして男女共に戯る。又タコ即チイカ、或いは、用図る盛んなり。新聞各々付録をつけて種々の絵画を入れあり。これ実に23年元日の景なり。元旦の作

あけぬれば 昨日はすでに としぞとさり 今日のはめでたき としの初春

2日 50銭席料、白米1斗2升1円20銭、茶5銭、8銭油、30銭炭、2円月謝料、7銭筆紙、20銭小遣い、醤油、塩、菜60銭、者外置合計5円。3円束脩、20銭火鉢、5銭五徳、8銭、土瓶、10銭炭入り、3銭茶碗、10銭器、15銭キビスト小茶碗、10銭盆、火鉢2銭、20銭小ブトン、15銭雪平と夫れの具、5銭箸、10銭盆膳、8銭雪平、6銭油入れ、合計4円47銭一度。加藤飛雲へ葉書を出す。50銭書籍。車代10銭。

3日 10時より、島地黙雷氏をすぎ赤坂吉野の宅に行き、夫れより梅原により、即ち麻布を経て弓削の処による。この2人は留守。夫れより下宿屋を発見し後、増上寺に参る。誠に立派なり遂に帰る。今村満生2氏、年始に来る。稗内君ら3人へ葉書出す。上田より書面受く。清谷より葉書を受く。国民之友構。

4日 笠原より3人宛葉書を受く。安本より葉書を受く。晩3人B店に行く。昨日日本人。

5日 朝より荷を仕舞し、11時発って、芝区三田四国町二番地四号田中キン方へ転宿す。昨日、上田へ義塾の大学則と国民英学会の規則を送る。夫れに手紙をそゆ。今日、今村局生へ新年状葉書。奉と藤堂へ葉書を出す。父へ葉書を出す。車代3丁にて、20銭づつ。宿へ3人で30銭与う。

6日 平山より葉書を受く。加藤飛雲より葉書を受く。片山より3人宛て葉書を受く。

7日 朝双書紙を貰いに校に行き、後ち弓削君の処に散歩し種々談話の後帰る。古河勇君来る。吉野静頼来る。晩、芝ら散歩す。檜山氏近頃在京の由。晩風呂行。

8日 朝より青山鍊兵場に行く。今日は観兵式なし。夫れより離宮より大久保の碑をへて返る。梅原来る。古河当家に下宿す。竹下より葉書を受く。今晚は古河と故普通校已来る。懷旧を談し、其

他種々被れの夢遊等面白きものを見聞せしを聞く。天蓮、石峯、焼寛、天頂山、洞達、石峰生。

9日 佐々木作一より葉書を受く。郷へ手紙を送る。日野義淵氏へ書面を出す。晩弓削の処に至り種々顔白き談を話す。言語のことについて也。昨日鍊場にて元普生村上意興に逢う。

10日 岡本重昌より葉書を受く。豊島の兄来る。文章英知最も必要なこと益々、感ず学ぶべし。能海散士大に嘆して、曰く古河の沢山文章あるに驚く如くなりハ中々一寸文章家となられせるべし日光に遊したる文章の如きは長く、且つ、名文或いは旧普通教校にて降誕式の日記の如き感ずるに至りなり。又新聞を午前から書いて社説論説文章の上手になる第一なり。彼の如く、漢籍も調べ等詩も作り文章二種とも所有る小説文章を読誦せば、甚だよきもの只羨しむ。予の漢字をなさざるを只嗚呼の言のみ。乗汽車中の一思想。明治22年12月13日朝星を頂て京都七條停車場に行き5時35分発の一番列車に乗込み東都を指して出でぬ。汽車の急々なる浮雲瞬間に千里を飛ぶが如く雨降らばふれ。雪ふらば降れ。川あらば架するに鉄橋を以ってし、山あらば通貫するにトンネルあり。実に一尅数千の変景に逢う嗚呼汽車よ、汝汽車よ君は恰も宗教の如し。元形の宗教現して有形の汝となりたるらん。今其理由を述し、汽車の必要物便利物なる皆知る処なり。これ有形なれば見やすきか致す処なり。今元形の宗教もまた如何となれば、汽車は欧哲の脳髓中より出たるものにして所謂大にして横堅十方三世を広く知り得たる大英哲佛老の脳髓より出たるものこれ宗教なり。其宗教は恰も、汽車の機関かなす働きをなし汽車の重大の荷物幾多の人間を載運する如く、宗教また数多の有情をして効果の都に運送す。其行為以って汽車の活発に幾多の困難障得を遮りて達する如く□□大風荒くとも天明の闇に知恵のがす灯罪障の雨雪如何に甚きも更に動くなり。涅槃の都に達せしむ。また汽車の迅早よりも早き弘哲車は十万億の佛土をも屈伸飛項即生西方指弾かぬ間に一飛び、道法と活発を共有せるもの、これ只宗教天形に有形に汽車あるのみ

11日 何の変わりたこともなし。只吉野一寸来る。檜山来る。19日々暇元普通教生の青年会を立ることをなし、月一度集会する様古河君等尽力中なり。風呂に行く。

世をすてて 奥山にすむ 身にあれば 月より外にと 小友もなし

11月29日髪つむ。

12日 日曜日、故普通校を論ず。新文学寮を論ず。反省会を論ず。伝道会を論ず。海外宣教会を論ず。亜細亜の宝珠を論ず。西本願寺を論ず。東本願寺を論ず。将来の仏教を論ず。真宗を論ず。英文会を論ず。新仏教徒論、(普通論校、=役人、教員、(舎監監事)生徒、家屋、管理、精神)也口奉と道まで逢い弓削の処に行く。稗田子卓より『反省会雑誌』5年第1号を受る。ひやめし、エビにつき宿に言う。古田勇、小林智倒、年始状を封中に入れて送る。『反省誌』大に説及び手際宜し。国粹主義を明白にす。石峯稿、世間往々国粹主義を誤まちするものあり。国悼しからずや爰其誤謬者の為に正す。国悼とは何ぞや、曰く、決して保主にあらず又新保守にもあらず尔れとて欧化主義にもあらず。世人の言う改進黨にもあらず。曰く、別々に克明を与うるも可笑すけ明白清潔なる主義なり。即ち昨年頃、なけの世論の傾向多く、一よりなすに至る。皆政化主義をとらざるべからずと西洋に沈溺者多し。彼等に対しては一より十、十より百、皆欧化に賛成すべからず。元より東洋に先んじて西洋は進歩せり。尔はとて、十即十枚即百善なるにあらず。倒て要せずして彼等欧風流行中吾邦人有志忌憚せるものなしとするか。尔として、保守家が欧化改進黨に反対しめ、一より十口。日本風俗等有害尤益物あるも、願しす萬物保守の舶来物とさえ言へば有益尤害尤も萬物忌憚するが如き偏傾は論にもあらずの中道を執て履行するものなり。故に欧化改進黨の偏論盛なれば制するに保守を為し保守に向うに改進黨を為し以って、平均中道を持つにあ。尔れども、二者中寧古政進黨主義を懐いものなり元より保守も国粹家なるべし。吾邦のものは不益物も保存するの意にはあらざるべしの又改進黨欧化もふる実物も共に輸入するの精神にあらざるべし。尔れは、之れ又吾黨の主

義に帰すべきものなり只吾人の眼中我国あるのみなり。明日は慶応義塾へ入学試験にかかるつもり。明晩の当此（午後10時）には、昨日に何級なること明なるか、今は知らずに遊んで居る。明日の前兆をとう恰も12月12日午前11時頃文学寮の教場にて授業を受けつつ考えて、明日11時比して名古屋迄に汽車にて達しおるかと思整せしか如し。第3等なればよし。第2どもは想像外、第4等はいやでもやりいものなり。分か合か余にと如何、如何。

13日 昨夜、2度火事ありたり。昨日、今日は大風なり。義塾へ行き双書と履歴書を出す。其履歴書左の如し。（試験は2・3日はなき由）。履歴書 明治元年5月18日生まれ。明治8、9年小学通学。明治10年6月以来、広島に於いて、漢書を脩すること4ケ年。同18年9月以来数ケ月間、広島在学。明治19年3月以来、京都普通校に於いて、左の書籍脩読す。英米七出家集、ヘスチング傳、クライブ傳、博物、地文、物理、初歩化学、歴史、ギブー文明又代数、幾何学なり。右之通に御申候也。1月15日 能海寛以上。入学証書は規則書の如し。請人は豊島勝太郎氏を依頼す。松島少し病。文章。晩10時とも、又火事あり大ならず。風邪を強くせざる法方酸2・3滴と砂糖と湯を混ぜて呑む。入社金3円。『国民の友』読む。古河と下宿屋を捜査す。彼1人3畳間、三八。我々は三々なり。今朝にて三部経終る。

14日 今日試験なし。芝公園を散歩す。体に益し。晩、古河転宿。原因は冷めしと悪取扱なり。印度史、朝鮮、安南、緬甸、暹羅史を読み、金玉均等、其内日本人口川の初代比暹羅にゆき国王となりたる山田長政の傳、顔白し。『朝顔日記』宿屋の段読むべし、買うべし、顔白く利あり。

15日 偈行品終る。「真宗宝典」1日より今、漸々、爰に達す。今日、試験ありや否。あらば如何なる結果か。雷音。京都にては9日より明日までは報恩講なり。予、毎月16日と28日は精進すべし。朝、昭鳥雪の曙とす。「原揚屋の段」読む。面白し。今年1/2 of 1/12 去られり。陀如口。小雨。橘より羽書を受く。古川の原に行く。基督教と仏教という書に高橋の説に感服せず。尔れども、ゴルドンガ演説中にマクスミユラル等の手紙の如きは深く注意すべき処なるを知るマ氏、仏教の大の婆羅門は、こと別め真宗の如きことの、夫なるを証するに梵語に通ぜる。彼にして、証しめ、曰く小は正大乘は婆疑はば印の梵經を見るべし等、其他如なる説多くあり。晩、小火事。明日晩この頃、十時は果して試験かすして如何結果見ゆ。当時風邪にて困窮す。太閤の記。寺子屋の段、管秀口の談おもしろし。英国マクス、ムーレル氏の本願寺僧への説談左の如し。予が見解を以ってすれば、この阿弥陀經教文の釈迦の本来の教に相違する処は決して疑いなし。彼の頻りに阿弥陀の名を唱え死に臨んで、一心に之を唱うべし。則西方極樂に入り限りなきの幸を受くべしと云へることは日本仏教徒の祖仰する処にして、即ち、釈迦の教えなりと主張するものなれども、釈迦は自ら極樂浄土、又弥陀の児音などの説をなさせしことなし。況や、其名をも未だ知らず。且つ、この阿弥陀經の全体の主意は釈迦の教えし目録の法則に全く反対するし、斯の如きの教法は開けぬ国にては人に益することあるべけるとも、日本如きは、今や將に開明に進んとすれば其人心に適合すべきものに非るや明し。又云えり日本にある仏法を信仰する数百万の人々に、予れ、一言以って告げることあれとす。彼阿弥陀經併に惣ての大乘の教は仏教の本色に非ず。皆釈迦の紙粹は教と乗り所あり故に真正なる佛徒なるらんことを双はば、宜しく古き經文即ち小乗の經文に存する釈迦の本教へに帰るべし。尔るに反て之を棄て弥陀の浄土杯愚にして、且つ、害ある小説の如き説を個して耻じさるものは嗚呼亦何の心はや。

16日 「吐論」終る。朝汁をかえたれどもなりし、漬菜を持来る亦一奇。晩食は不精進。晩えんいの祭り、芝公園に行く。あす報恩講式及び嘆法門を読む。明後18日、午前8時入学試験執行申来る。其結果如何か。佛閣基固遙及び梅祖梨耶之三会法水流遠普潤六趣四生之群萌へ。風呂に行く。この前の談話中、『阿弥陀經』とは『無量壽經』のことにして、梵音を只「阿弥陀經」と云はれし

ならん。東君印度にて印の僧大乘非佛説を主張しめ固古故に腕から以って投つけんと。

17日 『弘法一代記』を読む。梅原、吉野来る。

18日 今は、これ午前7時55分只今、出立して試験場に趣く。汝返りたるときに正に速く如何なる結果なるかを告げよ。今爰に記して一寸先の暗の夜を占ふという雨。嗚呼、11時頃帰宿、豫科3番1に入れられ、別科5級とかや試書はちとれる万国史、123ページの七節もやすし。尔るに、かかる事とは午後1時又行き、再試験を頼む。尔れども、聞入れず。西依は入らざる由。芝公園より勧工場に行く。東京第一の場なり。夫より散歩。中外国児5人、日本人を輕蔑するを見、慨歎す。書處共見舞て返る。晚古河、弓剃来る。日蓮伝記を読む。彼の主義は只諸宗諸佛經の虚勢者の為の開祖にして内弥陀信者にして、さすが団国即穢民の子で、げきにして少しひどし。晚、2時頃火事あり。これ、19日の朝書す故爰に記す。

19日 「日本博士傳」を読む。石見、島根県に左の如き人あり。理学博士小藤又二郎。津和野の旧藩士安静年3月4日生まれ。地質学家13年より16年まで獨乙にて地学ライブチヒ大学で理学博士となり帰る。21年6月日本博士となる。17年この年俸1200円。小学教科書等着す。官費海外留学生。山口半六。梅錦之丞。小藤文二郎。梅謙二郎。島根より出つ。日本中に69人中4人。法律学士梅謙二郎。理学士田辺三男。山口銳之助。小藤文二郎。医学士梅錦之丞。千原春甫。製薬士片山吉則。工学士菅田繁。以上、島根県人なり。午後1時より築地にて、松山氏の日本仏教青年会設立につき、故普生徒集まる。予も行く。会者、今村、古河、弓剃、吉野、藤本、戸田、橘、小原、良甫、吉住、菊池等なり。松山の談話のち種々談話ありて、四月、氏上京の事等、宣教会支部等、夫れまでは、同朋を募る斗りなり。5時会散もどり、道中銀座にて小西、為政2人に逢う。

20日 不快。日蓮傳に死前病の為め、經卷を噛み齒2枚書につきおちたるが如きこと。又密に本懷を告げて、臨終に弟子に告げる。曰く、我弥陀經の家に生まれると雖も幻くしめ、大志を企て一度天下を掌握せんことを招れ、しかども当時、鎌倉の威盛を志望必ず遂げかたきことを知り、法鉢く名を万夫に揚げ、誉々れを后代に顕されど覺悟し、この一宗を開きしなり等、又上には奇術を行う為法然尊の名号等像なれば目に針をさし后行ふ等、又終わりにこの伝記は秘中秘書なるを后生曰弘写しとりたる為め、本山(身延山)より遙にしらべ代をなりともとし等、試に外道の如く、邪見真宗なり。風呂行く。

21日 寄宿所を尋ねる。テンプルありたり。席料2人にて1円80銭。米2斗4升2円40銭。2人60銭。炭油1円20銭。菜(内醬油30銭20歩。味噌60銭。野菜等10銭小使)右豫考。第一の着述は廢止棒を作るべし。不利本山政府の不利所等廢なり。晚、書面と共に金10円父より受く。晚、古河等4人散歩す。汁粉煮なると行く。『倭父範』を買う。

22日 朝一寸宿寺に行く。午後、品川の近方いて散歩す。大同団の本部を見遂に帰る。晚、古河来る。吉野来る。石田喜三郎より書面。齊より書面を受く。『倭父範』種々読む。金を局より受けたり。遊行上人の「六字名号」を處につりつつあれども真偽不明也。

23日 昨夜、午前1時、予の宿より3町の処火事にて大に驚く。2時頃鎮火。朝より大雨。生死の稠林を開き煩惱の荒野を耕して元上の佛性を植ゆ。古河来る。西依『英国史』を買う。2冊4円。風呂行く。

24日 『蓮如上人傳』を読む。晚、古河来たり。島地氏の「仏教改革」の為、竜宮、6種に地振動須弥山等の吟へなること等證したり。

25日 吉野来る。西依、山中、神田に転宿。豊島君来る。昨日は、午後中は築地の海岸及び居留地等種々美家美物を見たり。午後3時より、予、学2人、芝区三田豊岡町の寺へ移る。晚、散歩二人晩飯ソバ、買物す。t h、郷へ羽書を送る。龍源寺65番地越溪宗逸方。

26日 松日本に行く。藤堂来る。徳島十良兵とも読み涙流して、晩、七時いて居り餅とも巻て食しめ、散歩の為、出て藤堂を送る。如の処遂に、新橋より馬車に乗しめ其後一寸動めて鈴木、藤丸を見舞う。彼の姉居る共に病院になり。近々返る由其後、藤（堂）の処にて宿す。

27日 朝より（藤堂）哲と共に浅草に行き、后ちに、上野の何玉とかの名蕎麦を食し、公園を散歩し、展覧会に入り植物を見る。只根上り松と黄大梅花目につきたり。夫れより博物館動物園に行く。共に月曜の為休み。夫れより分かれて、予は、西依の処に至り。夫より又西と共に藤本、森須の処に行き、石橋左範等と共に種談し、西（依）は返り、藤本と共に騎兵の処あて同道す。道すがら文章演説等種々仏教上の談会をなし、遂に分かれて、古河の元を尋。又書物を返し、種々談す中、弓削君来る。己に、6時、予は晩食を見処に於いて食し、后松島来る。后、2人は先に返り8時過にて弓（削）と2人談し、仏教上新運動等文章実義、廃娼論を非難するに生理上よりしめ20歳頃は情あり、故必要等自ら食することと食することは具して天我器を患む呉ことなくは地不永、人死絶す故に禁娼はよきか。彼の歴史を聞き親の乞食しても資本出す。たとい大水の為に家は浸かるとも野に放ても大に感ずる処あり。遂に返らんとす。大雨傘を借る。但し、今晚返さねばならぬ為に困る。大便には行きたし、道の悪い雨の降るに日和下駄にて長き道を3回往復したるには困る返つて法典ども読みて寝る。10時時過ぎ。

28日 『法典論註』上下終る。松島西の処に重て、持ち行く。英文を以て主義とすべし。否方便とすべし。新島譲君は3・4日前死す。24日晚、古河君より聞く。明治学院にては、遥葬になせし由。嗚呼、敵も味方も共に死す。近れかたきは皆死す。勉に嬸婆有て口法盛ん。当時は耶に新島氏ありて、佛明光ならんとす。ああ玉を磨く磨剣紙を忘ことがなし。又国民としては上等の事業をなせし人なれば、同情悲しむべし。何ぞ、耶徒のみならんや彼の大学、益々盛なるべし。佛家の政談演舌は不忍許なり。降雨。

29日 曇天。晩景火事あり芝。散歩。少々買物す。『Wisdom and Mercy No.1st.』を作り、英文を作り、主義を述せんとす。浄若蓮華不受塵浄蓮の出处又は信心清浄即花開文。昨日は過ぎ津。今日は過ぎけ里。

30日 英文とも少し作る。午後、松（島）と2人発め、街を発め街を過ぎ林間を過ぎ日蓮宗の寺に寄り、梅林辺を通り洋館の前を通り小路を通り上り下り遥かに東京潟を望見し、狭き処をへ藪を過ぎ又洋館の前を通り大道に出て遂に品川に行く。汽車あり。望みより馬車ありて、病院あり。夫より帰り、泉岳寺に参り5里にて、47人の義士を見る。1人を見る代は5/47 なければ一毛。七忽弱なり。この寺は、これ大同団本部なり。禅寺夫れより、上り下り教会堂を過ぎ、下宿屋を過ぎ交番所を過ぎ、遂に返る。松島と僕へ西より文学院は、如何かと申越す。松島は、西依の処に行く。六時頃、予は、独り段々考え実業も盛んなるに、又必要なるに金のみ使うて長々勉強しめ未へ望みなきかな。一層哲学館に入り、来年8月、卒業しめ、よければ福沢の大学に入り、止めれば返る。又哲の方なれば金安く、佛友も出来種々よし。口福塾も大学に入る目的なりは何ぞ、予に望みなし。予は、これに入るは只一寸位置のみ得たきなり。年限もおよそ5・6年は必定なれば秦とか酒生の様な気なれば、よけれども、夫れてなくても、平山又は竹下でも考えたら年限は短なれとも左様な訳にゆかず、井上に行けば、兄には良し、内へも。但し、友が哲館を悪く言うが悪し。嗚呼、東京へ来るとて、早2ヶ月遊びしかおしおし。聞く、この寺は福沢の菩提処にして彼洋行後、初めて慶応義塾を口寺内におき自ら教授しおりし、然る処、今は懸かる様に盛大とは、はてな一彼は、耶は不好の由、むしろ佛の方なる由。国に対しめもやは信ぜられぬと彼が言いしと、御新造さんが言えり。井上、真、桑にもよし。明日は、哲館井上に会うべし。「法の話」と「反省会」の15号、家内は続学編輯して一部づつ、コングリゲーションに与う。晩、就床の中にて昭思すれども、只上の

如し。風呂行く。

31日 『賛阿口偈』終る。明日より教東集193片紙、1月中一日より読終る。今朝は、4時過ぎより寝られず、只将来の方針のみ考え一考す。案出ずるは決め、哲館に入るべからず。やはり福の大学を卒業すべし。竹下、平山に対しても、文学寮に対しても、又将来の目的に付きても、父母有志へ対しても、6年には充分卒業すべし。何ぞ、小生に安じて哲館に入るの考え出せしや。今後、満4年は、郷より資本出す約束。后2年は、本山に仰ぐのみ。つとめよや、つとめよや。其為には豫科にてもよろし。正科に入るべし。来月は其決心し、年□月由かりくて、年をなし夢この内にしてはやすぎるけり。□□。もはや梅は盛りて桃花桜花モチヨコチョコ咲おれり。春かな未だ鶯声を聞かず。吉野、梅原遊来す。東京にありて来て早まりたるを悟る等談す。京都でも勉強さえすれば済むことなり。必然福の大学に入る目的ならば早い程、徳あるなり。松昨夜丈け今日、午後四時過ぎ返る。友花憲作来る由。豊島来る。石田喜三郎へ書面を出す。

「春秋日記」

石峯

明治23年2月

1日 午前一寸、塾(慶応義塾)に行く。藤堂に英文にて金借の葉書を出す。「安楽集」読始む。古河来る。吉野来る。「国民新聞」一号を買う。豊島兄弟2人来る。晩、松島談話聞きに行く。餅炊きて食す。好味なり。新島(譲)は先月23日午後3時20分死亡。晩、英作。

2日 午前11時より、散歩方々、麻生をすぎ御所をへ藤堂の所に行く。聞けば、昨夜1時頃沢井洵上京し、加藤方に投宿由し。但し、予は彼れ、今村満生の所に行き留守なる為面会せず。午後5時頃、山中の所に行き、藤堂と九段まで同道、勤工場を見て分かれ、月光によりて御所の後を回り、御園内へ一寸寄り、電気灯に照らされラッパの声賑やかにして、又は家まばらにある処を経て、麻布に出て議会堂に7、8の女、7、8の男等及び若し賛美歌をなし聖書を聞く。1人の書生入り来る丁寧にして、予を携うが如きに甚だ好し遂に7時30分帰着。夕食をなす。立花今日我元に來たる由。

3日 朝、「国民の友」を買い新島の肖像を見る。8時塾に行き履歴書を出し、豫科2番の1へ入り、書籍英国史、化学、ナショナル第四読本、簿記、月謝を納め、10時より、会話フアーロット女の授業を受く。皆□□行なり、11時より漢籍、午後2時より英国史の輪講。3時より化学終わりと、少年等の体操とも見て返る。化学のとき宗教家の如き。英世界は即ち、年間位に出来るものにあらざと先生云へり。いずれも、2、3万年よりも昔しなるべしと。宗教家とは如何なるもの耶ならば知らず佛にはあらざるべし尓。只宗教家とはあまり云すぎならん。生徒共は帽かむりつつ、ストーブにあたりて授業す。又先生をワヤンショル先生も又いばらず平民主義なり。業4時間有るも皆3、40分位より長からず。日本三府吾拜三府に各々特性あり。京都は宗教地。東京は政治地。大坂は商業地なり。京は保守。東は改進黨。大坂は自由なり。京は幽美、東は活発、大阪は巧言令色。京は山、大阪は海、東は里なり。京は仁、東は智勇、大阪は無、京は静、東は騒大も騒。

4日 10時より音読。11時より休、竹下欠。午後2時より簿記学始めてに付、甚だわからず、一寸も感知仕方く、以上二篇の書にて下篇、初めより一例題終る。3時より化学。吉野来る。金不融大困難。実に不規律なるには驚ろくなり。吉野等は本科4等に入られるとかや、本科、然れば2年にて大学に入るべし。予も勉強して、2年目に大概入りたきものかな。小雨。福沢外9人ある由。昨夜小火事。

5日 10時より校に行く。書取誤2。漢籍。午後12時より、あちこちと家探索。一時過ぎまで

松島は家探索に神田辺へ行く。2時より英国史、化学終わり返る。資本考え考更に漫然、漫然、嗚呼、嗚呼、資本の為に学問上の思想も、佛教上及び、教徒の将来思想も、文章も、英文も、更に考出する勉強せられざる。却って、資の為に脳病を起こさんす。嗚呼、遠寺の鐘は夕拝をしらし、日もかすみ気死に入る如し。福沢塾の後より富士を遥かに望みして、実に白雪立派人彼れの如く秀てざる可らず。なり口又はガンガン、ギョングヤン人声はザワザワ、ヤーヤー、ピーピー、グワングワン、ギーカチャ、ゴロゴロ、ヒヤヒヤ、ハハ火のもゆる音はパチパチ、犬がガンガン、ギョングヤン、ああ只独り夕食とも食め菜もなく、残り菜漬共々食後は只暗く口口雨戸も閉めランプも灯す。6畳敷の間のすまに、座をかまえ枕にすがり、日も暮れて夕食も終わり、置時計の音はコチコチコチコチ、さて何時かなと見れば、丁度6時、おお今日は塾にて皆等の話しに、今晚6時から三田美以教会にて婦人とも廃婦論の演説をなすと皆行ひて、ヤロヤロと云いおりしか。今晚は、予も只独りにて、松島も神田辺へ行たれば別に話し相手もなし。われよりむしろ行て、どんなことぬかすか聞てこよとランプの火を細め、寒からずと袖なし着添え、門の外へと出にけり。早や月は赤々と輝きて、予の行に友ない、遂に教会堂に達す。見れば多くの書生教会所の窓に沢山のぞき、大な声して、評しつつある赴き。直に見るは満堂の傍聴人戸は閉め切りて1人も入れず。然るに、人々は多くおいおい集まる。皆窓にのぞき大声、悪口、然るに、中にはオールガンと婦人等多く賛美歌で終わりと、演説始まらんとす。多くの書生は、窓より見えぬ聞こえぬの一ひやばかすわれ、ワー、ワー、大騒ぎする内に多くの書生は婦人席へ窓より数10人入りぬ。戸をたたきガラス障子ガタガタ云はせ其内、この堂の後ろの散歩場にて立ち聞きえんにて演説することにきまり、皆そこに行く。処が一寸男子30斗り云う人皆、大評大音大声一言も聞こえず、其内1人の婦人また演説を始む。また大声となへことと、只2、3言のみつこに一人男口やらむ。皆書生怒りて、乱れランプは落ちて割れ、サーサー大騒ぎ。後の人少しく失敬の言ありたる由。書生20人ばかり大いに進んで大議論互いにたたかい、其内、又井のきわにて始む。其内巡查来る。7時半頃、然れども、えんからつきおとすやら大騒義論は3、4箇所始む。其内、向こうよりは謝るからと云聞かず、2、3人の総代を選び論せんときかず、あやまり書を書く事に決す。然れども、弁士おらず殆んど、一線有余の壮士書生は皆いかり、このこと決せずば、明日になるにも返らずと、其内、又窓のガラスを割り互いに喧嘩、巡查皆にて5、6人来れども何ともようなさず。曰く皆用見に非ず。無用のもの返るべしと巡、皆曰く、用あり用あり返らずと、遂に殆ど9時半とも覺ゆり。此一の書を、其会主より出ず其者は弁士……儀失敬の言ありたる由。すまねども、今其人見えねば、明日12時に塾へたずね出すからこらえよと月日会主一其とき、よしたるは塾の生にして、明日は充分の所地をなすといきどおりおる。又皆々は十戒に彼等は、ふむけりと云し、又我々は彼等如きものにまんちやくせらるるものにあらずと言ひ。又コーガイひふんとか、飯も喉を越さず、是れをはらずばと云い女子等カローラクする様なものにあらずと云う。種々の雑言、皆ドンドン幾千百名は、戸を押し開き入り込む大変なり。遂に、明日のこととして拍手にて分かれ返り。弓削の処に寄り、種々話し聞かせ、又昔のこと話出し、菓子食し茶を吞んで、九時半頃返り。実に、6時より9時半までは3時間半、全く大声大論大進げきに遅れり。然る間も、月は赫々として彼等外教徒も、我々書生等も、皆照らしつつありきや。ははきとうをなしたり。間には石をほおるものあり。生徒等、分るときは慶応義塾万々歳、万々歳と云へり。月に照らされ返りても、返れば机上にハウス暗き、ランプの火、遂に日記を書し口に寝床に入らんとす。12すぎ、おだ、松島は返らず他所に泊る由。寒む、寒むも、冷き着布団の中に入る。あぶるには、早や火鉢の火も消えて膝坊主はヒヤヒヤ。今晚は、実に大戦さの如くありしなり。かのガラスの割れを一片持返る。これ割れたら足にて踏つけたる粉の一つなり。

6日 『安東集』260頁に毘富羅山とはヒマラヤ山ならん。又昨日読みたる中に猛虎等の多き処等は皆印度の地の有様にしてこれら世界と云へるなるべし。午前、音読と漢籍続文章軌範を□かる。午後、簿記と化学、学校の廣告場に左の標示ありたり。文言は、田中儀三郎之右者、昨夜、四国町教会堂に於いて諸君に対し屈辱の言を發したる段、不都合に付、談判に及びたる処、本人、大に悔悦し、本日、本塾に出頭し低頭平身、深く其罪を謝したり。有に付き校長、小幡先生並びに塾監増田先生の旨も有し、事穩便を旨とし、格別の寛典を以て、彼が罪を宥怒せり。この役当夜傍聴の本塾学生に謹告すと。2月6日 浅場一昨日、拝見新聞を出逢う。松島日本に行く。予は、風呂に行く。藤堂に書面を出す。西依の金来る。羽書、同本より来る。

□りかかる 雪も激しき 寒さをも 耐え志のび来て 梅の花 目には見て はなにはかぎて よろこんで まく実もとれる さ□梅の花 夜おそく松(島)返る。2人にて40円くる。不平予をしめ大学に入らざる様に云い予は耐ゆ。

7日 朝、石原実人に金を千円はいるなどおどかす。予は只□□□ヒンキウモノ馬鹿もの大学か出来るならやってみよ。手に合たら、こりやめよと、りんきの様なもの。云いぶり、予は思いはおもえ。云はば云へ。如何様なりとも、先でうらやましがりて彼の輕蔑をふりしゅせんと欲す。つとめよや、つとめよや、自ら勉励せよ。能海よ、能海よ、南一仏。朝、松は銀行と本屋に行く。予は寺へ『反省雑誌』16、17、2冊、与へ。転宅の旨云う。西依は、いかり顔を見せぬ。あれ程は、松(島)よりは雄漢秀なり。西(依)は頓着せず。松(島)は怒り不平顔を見せる也。午前、書取と漢籍、午後、英国史と化学、吉野来る。松島未だ、七時にも帰らず。月謝、日々7錢づつと席料3錢と、日々10錢は、この2つに入る。3錢5厘錢の日々米代3合5勺。5厘、日々醬油代。5厘、1錢の日々御菜1錢5厘。茶、洗濯、紙筆墨、炭これで7錢。合計日々17錢なり。(6錢風呂、8錢郵便、6錢雑誌)8時頃返る。松が、転せんとし処、インキが減り。服にも暇入りて用せず。明日に決す。

8日 朝、松(島)は行く。神田屋の処、車12錢と15錢にて行けり。予は、学校に行き作文「富国と強兵と何れ先んずべきかの題を2枚書き、9時より10時すぎ返る。当分は、この寺に居る。屋賃3疊で50錢実にさびしくかわる。吉野一寸来る。藤堂より葉書を受く。淋しいで、古河の宿に行く処、沢井君は居て、話つつあり。依って、聞く処、佛家崇拜すべき人は梵学を、未だ充分とせずしめ、汲々たる勉強者、南條哲學家、新思想家、浄土門、当りは大乗中の大乘西洋人の深く及ばざる宗教なり等と)述ん。中西牛郎君の2人なるべしと「円了、了法、了念、了隱、聞精、專精等。夫れより、弓削の処に3人共に行き談し、4時頃余は分る。外3人は梅原処に行く。今日は大々風。晩より大雨降る。物理と代数を始む。晩から也。

9日 中風と大降雪。寒甚し。藤堂から葉書を受く。藤堂に葉書を出す。内への手紙を書く。1年予備3年の大学如何。日曜休。

10日 予学成就の上は佛教大学校を設立し諸宗合同して南條君を校長に命じ文学科をおく。撰科をおきて佛学専門となす。生徒は僧俗を撰ばず。資本は総本山及び信徒とす。午前8時から2番の物理と9時から3番の物理と10時から会話と11時より漢籍と午後2時から簿記と3時から化学を受く。藤堂から葉書を受く。南條故文学寮生に塾にて逢う。

11日 紀元節 藤堂より葉書を受く。沢井帰京す。『安東集』終る。□□□の経説等へ朝より發しめ出ず。先ず、「国民朝野」、「日本等新聞」大附録ありたり。予は、前の2種を買い内へと安本得成へ「朝野」、岡本へ「国民」を送る。皇居の前に行く。実に沢山馬車或は1、或いは2頭。大臣も軍将も官員1時間ほど立おるあり。凡そ56の馬車大門の中に入る。馬車を以って、水をまき感心。夫から西依に行き松島と話し、西(依)にて中飯を食し、午後、出でんと発す処大雪。遂に

藤堂に行き談す。大雪6時頃まで続て降る。5、6寸余遂すとなる。

12日 朝より藤(堂)ノ下宿を訪ね、道荒れきに弱る。午後、様々、樂猿町四番松本ヨシに決し、2時過ぎより移る。晩、また其家に宿す。晩、寿司に行く。授口はみせず休の由。3時間、ありたり。予は休む。

13日 朝返る。九時帰着。10時から代理ロイス氏音読。11時から漢書。午後2(時)から簿記。3(時)から化学。国会議(事)堂はひとあり練兵のほとりにあり。晩風呂。稗田へ葉書を出す。安本秀(人)へ葉書を出す。

14日 8時から物理。9時から同。10時から書取。11時から漢籍。午後2時から英国史。3時から化学。一寸豊島の処に寄る。晩、弓削、古河来り。「経緯会」種々談し、古河も近々来るべく云いいし、自炊に大に賛成す。6時から来り。8時半返る。説教始む。12、3、両日不続。

15日 8時から簿記の試験他人のを見写し、出しおきたり。一寸も訳らず。豊島来り談す。机を渡す。昨夜は、大雨の処、今日は好天也。弓削君一寸来る。共に梅原の処に行き九段階行社開業式に行く。3人共なり。天子等、誠に盛大花火ありたり。松島の処に吉野来ると出逢い、予は晩食、藤堂の元にてなし。共に、又見に行き、6時半分れて、予は返る。8時半帰着。昨夜、小火事ありたり。大概。毎日なり。又廃娼演舌(説)この間の処にてなす。予不行。

16日 『玄義』終る。憂雨降りて甚だ憂暮郷里の志甚盛んにて、寂しや法心起る。晩、勤行す。今日は誠に郷里を懐い帰りたく、種々過去のことを想い気憂々雨は降り、実に物すごし(黄粉餅を食す)。午後、三田を一寸散歩したり。雨と道の悪しきによわる。稗田君より、今月の雑誌二部と葉書を受く。今日は父死亡の日也。嗚呼、早く帰りて母上を安心と楽、祖母上、兄上、初、楽させ喜ばせたや。其他、皆内外の人々を喜ばせ度きこそ、小生の存念也なり

17日 昨夜は種々沢山夢を見たり。お初が死し、悲しかりたり。夫につき帰国葬式をなす等にてありき。朝はふらっと休み付ては豊島の処に行て、「ダーウキ氏の傳」を読み大に得る処ありたり。載せて『東洋学芸雑誌』百号にあり。種々読むべし。或いは、写しとりおくべし。11時から漢籍。午後2時から簿記。3時から化学。今日は、この間に法事の如く幡をも立て沢山の僧、勤行す。聞く、一昨夜、又三田義塾にて廃娼演説議論ストライキありたる由。巡查も13、4名来ておりたる由。5、6名補へられ説諭に預かりたる書生ありと新聞にも載りおれり。

18日 大に私立大教校を我郷に設立したき存念起こる。処は薬師山の南なり。普通科、高等科、別科等生徒も殆んど知名、5人位いの教員にてよろし。午前11時から竹下、漢籍ハロツト休也。學術を以て緯とし道法を以て線とす。午後2時から英国史。3時から化学。安本秀人から葉書を受く。古河来り。明日より来る事を諾す。

19日 8時から物理。9時から物理。10時から音読。今日は代理としてウキリアム君来る。日本語上手。また耶蘇になりませぬかと人が、汝は耶蘇かと問い、彼れ、然り然りと云いし、風土から漢籍。喜ぶべきは4時からサー・エドウキン・アーノルド当校に來り、見える由。午後2時から簿記大尾3時から化学。この科中、サー・エドウキン・アーノルド令嬢と共に福沢先生等数名來塾。その時、サー・アーノルドは我等に空氣を分解せば酸素と窒素となる。酸は炭素と化合して炭酸なりて用をなす。窒素、残りたるものは、如何なる用をなすや。答えは20円やると云へり。先生に問う。世界の一問題にして、只今では、只酸の猛口を防ぐ為のみと云へり。3時間半休業。演説堂に於いて長々と氏(嬢女は横に腰掛けおれり)演説せり。予等は只 Budahien or Christronity 写言の少し知れたるのみ通弁なき為、皆了解せざりし。遺憾、いかん感じたるは國に英雄出て、世界の光りをなす人、生れば、其國の光榮たること。例えば英にワット、ミルトン、セキスピヤー等出て世界を利し。既に口米にフランクリン等の如し。終わりにて、古河の処に行き古河去りて。予の元に転

宿せり。反省会の肖像よりは違うこれは、こわけな云に、云はれたと顔婦女は別品なり。晩雷あり今迄始めてや。パン食古河に於いてなす。

20日 宝典300片紙終わる。9時からクライブ傳。10時から音読ロイド。11時から漢。午後2時から英史。3時から化学。豊島来る。梅原来る。三田を回行せり。古河と2人同道にてなりき。

21日 8時から物理。9時からクライブ。10時から音読。ウキリアム氏は曰く、母音の前にては、the をヂーと云う。即ち、ヂー・アワーと云う如く、子音の前に於いては、ザと云う。ザ・ボーヒザホームの如し。冠詞 a はアと云う。ア・ブックの如し。又英や米にてもボストン当りの聞たる処 What ワットと云へども(watt とは少し違う)アイルランド及び米は通例ワットと云う。これ誤りなり。又ワシントンとは誤をウォシントンを正とす。Warm はウォームと云う如し。11時から漢籍。2時から代数始る。始めより也。3時から化学。午前野上他生徒を泣かせし。喧嘩せしなり。昨夜地振あり。

22日 朝パン。昨夜もパン。9時から作文。商業少を盛にせんと願すれば信用を固くすべし。藤堂から時計を資したる報を葉書にて聞く。予、痔の気あること今日知る。雷。午後0時半発しめ銀座を経、両国橋を互り深川区から本所区を端まで回り田舎まで出で、実は亀井に行く積もりの処、夫れから又新橋を経て返る。七時帰着。終日パン食をなす。京橋区にて、今立を一寸見たり。光雲(寺)に手紙を出す。

23日 日曜。到底、資本に見込なきときは5年間の暇を貰いて、洋行するに若くなし。如何なる。苦をなすもかまいなく、ハワイ国、南米、ブラジルから北米、英、欧皆東縁を回るに若くなし。午後風呂。髪つむ。43日ぶり也。晩パン。痔にて実に困る。

24日 物理クライブ会話(今日は weston と云う英人にして種々、話したりき)漢籍。雨降寒風。英国史(当る)。化学。塾勤惰表出つ。予貰う。序から義終る也。

25日 「定説義」始まる。不取冬夏両時唯取春秋二□と日観の所もあれとも、これ印度にて、春秋の日に正当なるは、先ず父上の許す所なれども日本、支那にては、かくあらざるべしと考う。日本の春秋は印度の熱帯を南北両回帰線へ進退の時にしめ正当なり。只今、佛教上の、予の考えはふらる山のヒマラヤ山ならんと18双の唯□の文を並び上げて、五尊を除き内に救うこと金剛石の信心に例へたること。この日観のことと辺也。物理クライブ音読(今日は Frances という宣教師にて前に金の十字をかけ教授せり)。漢籍なり。午後、豊島の所に一寸寄り、十銭受取る。代数、化学、弓削の所に寄り、化学書を借る。法心、今田はマコレーの文法を用いるなりと。エドウインの演説は体育せよと。又佛教キリスト教、サイエンスは、スリーフラワーオフ、ウオールドで、后一□に帰す。夫れを見出すものは、この学生諸君ならんとのことなりしと。英作、エドウインに付垂細亜の宝珠に付考へ

26日 物理クライブ音読(ウェストン君)この時間より火事ありたり、124、5戸、赤坂焼く。『漢書王命論』甚だよし。英国史、化学(当る)。昨日、午後5時、東派大谷光栄主東新法上す。西の法主も2、3日已前、東上せし由。終日パン食す。神田区も、今朝火事あり。

27日 午朝も、火事ありき。物理クライブ音読。漢書にてありき。代数、化学。郷に書面激なるを出す。小生の考えにては、目的を遂し為には道法に大きく背くことはなすべからず乍、然宿なる困難苦行賤業賤行少しは嘘を言うも目的なれば大道法、大利益をなす処、目的の階梯ならばよしと考える。漢書、漢字は読めざる、解からざるをはづ乍、然人に何法字は如何かかりやとか問はれて知らんとか、文字の書様の悪きとか、漢文、和文が拙い悪文とか言うには、更に恥究め。益々この社の盛大を期すべき也。予は、考えるに、第一道法上よりして、予の生村一個なりとも禁酒禁肉を実

行なし度きことこそ。火事ありき。

28日 昨日、浅草1,425戸の大火事ありたり。予は、今日まで知らざりき。物理クライブ音読(ウエストン新聞を持ち来たり、追々日本も英字新聞は盛んになることなれば読みなるべしとて、良文なりとて英国のダービシャー県の新聞を持ち来たり読ませしや。このことを語々話す(英文)) 漢書、大雨困る。藤堂より葉書を受く。英史、化学。月末なり。梅原遊来せられたり。語進して慈愛に及びたりき。晩、三田に出ず。大風。今月は入費6円48銭四厘。不足1円40銭。法主両とも東上したるは伯爵を受けん為とか時事新報は言えり。佐々木作一に葉書を出せり。『Wisdom and Mercy』Mo.1も殆んど終わり。『真宗宝典』334口なり。龍源寺にて、ある僧酒の儀を述るを聞く。粗庵ありても許してくれること等馬鹿ポーズや。23年4月10日



ほんに昨日のようにおもふ元日もすでに満2ヶ月すぎ残る唯10ヶ月春秋之日記第4号終 石峯

※ ※ ※ ※ ※

【解説】

能海寛の日記は、明治22年8月から『春秋日記』というタイトルで記録されている。途中で『春秋日録』(英文)、『まもぼろし』、『虎枕日記』、明治30年『使用日記』、明治31年『渡清日記』、『官話記一号』を経て明治32年『春秋日記』になっている。その後は、『第一号』、『進蔵朝佛記』、『飛越関碑記』、『入蔵途次見聞』、『在渝日記』などと、探検旅行中にタイトルを変えている。

国内での記録は、20パーセント程度の残存率であり、非常に残念である。しかしながら、出納記録が几帳面に記録されたものが残っているので、日記を補完してくれるので大変助かるのである。今回掲載したものは、22年9月13日から23年2月28日までのものである。22年8月から9月12日までの内容は、鼠の被害に遭い、欠落した部分であります。22年11月から12月までのものは、発見に至りませんでした。

『東北紀行』、『東京南東紀行』、『石見湯高鳴記』などの紀行記録が、日記が欠落した部分を補ってくれる。能海寛が記述した日記に目を通すと、日本全体の時代の流れが把握でき、時流を見据えた先駆的な考え方が行動によって実践されて行く様子がよく分かるのである。

明治21年10月からスタートした「E. C. S」(英文会)は、「新仏教徒」運動を英文によって発信をする画期的な事業であった。この英文会は、日記の中で「新仏教徒」という、一本の筋金を通った精神で「経緯会」、「仏教」へと伸展していく様が10年間の日記から読み取れるのである。

元来、日記という記録物は、後の人のために記述したものではなく、個人のその時代、時代の思想の変遷過程を記録しているものなので、精神状態によっては、筆も乱れたり、殴り書きになったりするものである。したがって、判読できない部分もあり、伏字としていたところがありますが、前後の判断のみで伏字を埋めることは避けておりますので、この点は、ご理解願います。(隅田)